西鶴の「しほらし」

――茶の湯との関連を中心に――

石塚　修

一、はじめに

「しほり〈しをり〉」という語は、俳諧用語として蕉門以来定着している。去来の『俳諧問答』における「しほりといふは趣向・詞・器の哀憐なるを言ふべからず。しほりと憐なる句は別なり。たゞうちに根ざして外にあらはるゝもの也」という解説にはじまり、俳諧におけるその定義は、これまでさまざまになされてきている。研究のうえでも、頴原退蔵や能勢朝次らの詳しい論考もあり、櫻井武次郎がそれを「いずれも〈しほり〉を、作者の内面にかかわる問題と見ておられる点では一致していると思われるのである」とまとめている。[1] ここでは、尾形仂の「しほり」の定義を示しておく。

俳諧用語。「さび」と併称される蕉風俳諧の美的理念。深い観照と表現への繊細な配慮から生れるしめやかな余情美をいう。…俳論書の表記は「しほり」だが、近世「しほり（湿）」「しをり（萎）」の表記は混用された。前者ならしっとりとした情緒、後者ならなよなよとした衰萎の情緒となるが、豊満華麗の対極の美に属する点では大異がない。[2]

この定義が、現在のところ、一般的な理解として定着しているようである。しかし、その語源や表記の細かな点については、曖昧なままでの処理がなされいる。じっさいに芭蕉の俳諧の理念として「しほり」を表現する場合、穎原退蔵は「さび・しをり・細み」と表記しているし、河野喜雄も「しをり」に「撓り」の字をあてて、

以上、「しをり」の語は「しをる」の連体形名詞である。[3]

としているように「しをり」とするのが一般的になっているかのようである。これらは、「しを〈萎〉る」に語源を求めているための表記といえる。ただし、これにたいしては、小西甚一が厳密な区別を提示している。小西甚一は、先の『俳諧問答』などの例からもわかるように、芭蕉の表記としての認識は「しほり」であったのではないかとの仮説をたてる。そして、その古典作品での用例を検討し、

このように見てくると、芭蕉の「しほり」は「湿る」の系統で解するのがいちばん適切だと考えざるをえないが、これは連歌論の用例についても同様である。

と連歌との比較をおこないつつ、連歌が「王朝的な優艶さ」を基調としつつ「しっとりとした趣」を加えたものを「しほり」とするのにたいして、芭蕉の「しほり」は、

芭蕉の句境が閑寂を中心とすることは、いまさら述べたてるまでもない。つまり生地が閑寂さを基調とするため、それに「しっとりとした趣」が加わったとき、良基や世阿弥とは違った感じになる。言いかえれば、少し陰気になるのであって、それがわざわざ「憐れなる句にあらず」とことわらなくてはならなかった理由だと思われる。

と指摘している。[4] この見解は注目にあたいする。なぜならば、中世からの混用がたんに語の表記の問題からだけでなく、語の意味とも関わりを持つことを指摘しているからである。この指摘に、赤羽学は、謡曲や茶の湯伝書の用例などを示し、「凋り」は伝統的「あはれ」の俳諧的表現であると反論し、[5] 表章なども「しをり」に「しほり」が含み込まれていくという見解を示し、[6] 小西のように厳密に区別することに疑問を投げかけてもいる。

さらに、国語学の立場からは、安田章がハ行転呼音との関連から論じ、「しほる」と「しぼる」の強い結びつきから「水分」との関わり、つまり、小西のいう「しっとりとした趣」が意味として添加されてくるとしている。[7] また、表記に関しては遠藤邦基が「シホルとシヲルは音韻変化の結果、全く同音に発音される」ようになり、「シヲル」「シボル」「シホル」の混用が生れたとの認定をしている。[8]

このように「しほり」は、俳諧用語として蕉門俳諧を中心にさまざまに論じられ、定義付けられてきている。では、芭蕉の俳諧にみられる「しほり」という語は、完全な芭蕉の独創なのであろうか。「しほり」の概念はともかくとして、語としての「しほり」が、その時代と切り離され存在しているなどということはありえないことではなかろうか。とするならば、俳諧師である西鶴の作品にも、「しほり」と近い語が見られたとしても何の不思議はない。乾裕幸は、「しほらし」をそれにあたる語として、

私は、連歌のしをれ（下二段自動詞）と蕉風の「しをり」（四段他動詞）とに介在するものとして、貞門・談林のしをらしを指摘したい。連歌のしをれは、このしをらしくをくぐり抜けることによって何らかの変容を蒙りつつつ、蕉風の「しをり」に流れ込んでいったと推定されるからである。[9]

と指摘している。そして、事実、次のような例がみられるのである。[10]

ア　『西鶴評点湖水等三吟百韻巻断巻』延宝ごろ
風下をふせきおほせてむら鳥の　水
いかりをうつてかゝる波きは　楽
しほらしくあそはし候

イ　『尾陽鳴海俳諧喚続集』　延宝八年か（乾裕幸の指摘あり）
せん香の店あらたに出したり　安宣
人心うつれば替る色唐紙　業言
しほらしく付けられ候

ウ　『西鶴評点政昌等三吟百韻巻』天和・貞享ごろ
白むくや着断に餘る袖の雪
しほらしき一句に候
詩に作り出す若鮎の鮓　（井）観
硯石かすみに流る桂川　（不）齋
句からしほらしく候

エ　『西鶴評点山太郎独吟歌仙巻』元禄四年か
明衣ながらの袖の夕ざれ
俳作しほらしく候

オ　『西鶴評点歌水艶山両吟歌仙巻』元禄四年（乾裕幸の指摘あり）
常にはならぬ御筆の跡　水
しほらしくあそはし候　是四句目ふり也

『江戸点者寄会俳諧』元禄五年

カ　硎釘の嫉やふかき花の艶　沾雨
　あはれ燕のちきりぬすみし　沾徳
　しをらしくあそはし候

キ　心の慳疎百千の岩　露言
　やさしくも母虎の子をくはへきて　岩泉
　付替りしをらしくあそはし候

これらアからキまでの例は、句の評である。とくに「しほり」か「しをり」かの表記の問題から言えば、管見では『江戸点者寄会俳諧』の二例カ・キのみが、西鶴の散文・韻文をつうじて「しをり」と表記されている例である。小西甚一の説にならって、表記のうえから「しをり」か「しほり」かを論ずれば、用例の数からして西鶴も「しほり」ということになる。ただし、西鶴自身が表記として「しほり」と「しをり」の厳密な使いわけをしたかどうかについては即断できない。それは、版下との関係があるからである。ただし、ここでは、版下の問題は別として「しほり」は「しをり」の意味しか持たないのか、ということを考えていきたい。芭蕉の例などからも考えて、表記は「しほり」とするから「しをり」の意味しか持たないという見方に問題があるように思うからである。小西らも述べるように芭蕉の「しをり」も『去来抄』には、

十団子も小粒になりぬ秋の風　許六
先師、この句にしほり有と評し給ひしと也。惣じて、寂ビ・位・細み・しほりの事は、言語筆頭に応しがたし。只先師の評有句を上げて語り侍るのみ。他はおしてしらるべし。[11]

とあるように「しほり」と表記され、厳密に区別されていたわけではないようである。西鶴も芭蕉が許六の句の

批評の語として「しほり有」と用いているのと同様、「しほらし」を批評用語として用いている。そして、芭蕉も西鶴も「しほり」「しほらし」を批評の語としているのは、『風姿花伝』の、

問。常の批判にも、「しほれたる」と申す事あり。いかやうなる所ぞや。
答。これはことに記すに及ばず。その風情あらはれまじ。さりながら、まさしく、しほれたる風体はあるものなり。[12]

という伝統を受け継いでいるためといえよう。

では、西鶴の「しほらし」の評価は、先にあげた句のどのような点にたいして与えられたのだろうか。芭蕉のように俳論からその評価の内容を具体的にたどれないとして、句だけから西鶴の「しほらし」をたどろうとするには少し無理があろうと思われる。

本稿では、その解明の糸口を、井原西鶴の散文作品における「しほらし」の語を分析していくことでつかもうと思う。そして、その際、連歌から発した「しほらし」が茶の湯にも流れこみ、その影響を西鶴が受けているのではないかという点を、まず検討することにした。そのうえで、従来の「しほらし」の意味の枠を超えた「しほらし」の意味のあることを検証しようと考える。それは同時に、芭蕉とほぼ同時期に生き文学活動をした西鶴にも「しほり」に通じる感性を発見することであり、それは、とりもなおさず、西鶴らしい表現の発見にも通じるのではないかとも考える。

二、「茶の湯」と「しほらし」

西鶴の作品における「しほらし」の例をみていくとき、茶の湯の場面と関わりが深い例が多いようである。

『好色一代男』

ア　五の一「後には様つけて呼」（遊女吉野についての描写）

　茶はしほらしくたてなし、花を生替

イ　七の一「其面影は雪むかし」（遊女高橋についての描写）

　手前のしほらしさ、千野利休も此人に生れ替られしかと疑はれ侍る

『日本永代蔵』

ウ　三の一「煎じやう常とかはる問薬」

　今は七十歳なれば…雪のうちには壷の口を切水仙の初咲なげ入花のしほらしき事共、いつならひ初められしも見えざりしが銀さへあれば何事もなる事ぞかし、

エ　四の四「茶の十徳も一度に皆」（小橋の利助が「ゑびすの朝茶」を売出す場面）

　口ひとつを其日過にして、才覚男、荷なひ茶屋しほらしく拵へ、

『西鶴諸国ばなし』

オ　五の一「灯挑に朝がほ」

　奈良の都のひがし町に、しほらしく住みなして、明暮茶の湯に身をなし、興福寺の、花の水をくませ、かくれもなき、楽助なり、

『懐硯』

カ　四の四「人真似は猿の行水」（妻が可愛がっていた猿が）

　それそれにあたりちかき山に行て、薪など柏枯枝松の落葉掻き集めてきたり、茶の下をもやし二人に給仕する躰おかしき中にもしほらしく、

『好色盛衰記』

キ　一の五「夜の間の売家化物大臣」（水仙の早咲きを口切りの茶事に賃貸しすることにたいして）

堺の乳守にて太鼓持の湊、塩の甚といへる男、「是は花車事ながら、値段のたかひものなれば、賃とつてかし徳」と申す、しからば女郎にも借賃取たき物なり、

『新可笑記』

ク　二の四「兵法の奥は宮城野」

又茶の湯は和朝の風俗人のまじはり心の花車になるのひとつなり、

『世間胸算用』

ケ　三の四「神さへお目違ひ」

泉州堺は……風俗しとやかに見へて身の勝手よし諸道具代々持伝えければ年わすれの茶の湯振舞世間へは花車に聞えてさのみ物の入るにもあらず、

『諸艶大鑑』

コ　八の三「終には掘ぬき井筒」（遊女井筒の描写）

此里の芋も、名にあふ月見茶碗とて、井筒やさしき手前にて、弥十桑五、嵐三まじりに、茨木屋の奥座敷にてのもてなし、

『西鶴織留』

サ　三の二「藝者は人をそしりの種」

茶の湯は道具にたよれば、中々貧者なりがたし。「万事あるにまかせて侘たるをよし」と言ひ傳へり。是利休の言葉にもせよ、貧家にてはおもしろからず。ことのたりたる宿にして物好をさびたるかまへにいたせる事ぞかし、

『西鶴名残の友』

シ　五の六「入歯は花のむかし」

柳に去年の水仙を生ませて釣り釜のたぎりを聞る楽しみ何かあるべし。此心、詫数寄をよしといへどこ

とたらずしてはたのしみなし、「世を心のまゝなる人の茶事は不自由なる体に仕かけたるこそよけれ」と宇治の上林の法師俳諧の座で語られしが是も尤に思ひあたる事あり

以上、アからシまで一二例が、西鶴作品で茶の湯に関することを描き、しかもなんらかの価値判断をともなう語が入っている場面である。ただし、ここでは、たんなる茶道具だけの描写や茶を飲んでいるというだけの場面については、煩雑になるので引用をしていない。また、カの例については、いわゆる煎じ茶である可能性も高いが、「おかしき中にもしほらしく」とあるから、茶の湯の雰囲気をも持つ例として加えておく。

この用例を見ていくとアからカの「しほらし」が茶の湯と関わりがあることがわかる。次いでカからクの「花車〈きゃしゃ〉」が続く。西鶴の作品全体からわずか六例しか見られないものを取りあげて、はたして西鶴の「しほらし」と茶の湯との関係を論じてよいものかという疑問もあろう。しかし、西鶴作品で「しほらし」が用いられている例は後で挙げる三八例とあわせて、四四例あり、うち六例が茶の湯との関連で用いられていることから、あながち否定的な見方ばかりもできないのではないかと考える。

たとえば、エの小橋の利助が「ゑびすの朝茶」の新商売を始める場面で、どうしてその姿が「しほらしく拵」えられなくてはならないのだろうか。わざわざ小橋の利助の風体を「しほらしく」する必然は、この章段として文脈のうえからは、あまりないように思う。この章段が「風流」な人の有り様を主題とするわけでなく、アやイのような例と比較して、その表現は唐突の感さえある。しかし、この表現には、当時の「茶」に関わる商いで、他人の注目を集めようとするとき、その姿は「しほらしく」しなくてはならなかったという前提があったとは考えられないだろうか。こうしてみると、「茶」と「しほらし」は、案外、密接なつながりを持って西鶴の表現のなかにあったと考えてみる必要性を感じる。そして、その感覚はけっして特別なものではなく、おそらく当時の人々にとっても常識的なものだったとも考えるのである。

そのことは、オで「奈良の茶の湯者」が「しほらしく住みな」す存在として、ことさらに描かれていることから

もうかがえよう。奈良で名物道具を所持する茶人松屋と思われる「楽助」の住まいのありようは、当然「しほらし」く作られていなくてはならなかったのであろう。さらに、アでの吉野とイの高橋の茶の湯の「手前」のすばらしさを評価する語にしても、ケの井筒への「やさしき」という批評の例もみられるが、「しほらし」の方がよく用いられていたのではないかとも推測できる。

いっぽう、「しほらし」に続いて多くみられる「花車」という語であるが、これは、どうも茶の湯だけと関わっている訳ではないようである。たとえば、オの用例の直前に「心ある人は歌こそ和国の風俗なれ。何によらず、花車の道こそ一興なれ。」とあるように、「風流・風雅」の道全般を称して「花車」と評しているととらえられる。茶の湯の批評の語として、「わび」がもっと多く用いられてもよいはずなのに、サ・シの二例にとどまっているのはどうしてなのだろうか。この点についてはさらに検討を要するところと思う。

茶の湯と「しほらし」との関わりが深いのではないかということは、小学館『日本国語大辞典』の「しおらし」の用例に挙げられている、次の例からもわかる。

『東海道名所記』巻六「嶋原」
桔梗の紋は藤江也。あげ屋の内に部屋をかまへ。…知音がたに茶の湯をいだす。床のかけ物は。ある時は定家の短冊。行成の朗詠のきれに表具をし。虚堂の仮名文。無準のいろは歌。さまさましほらしきかけ物を。客によりて。これをかくる。[13]

「子盗人」『虎寛本狂言』
扨又此茶入の姿形ちのしほらしさ。是は何を一色取てもいつかどの元手じや。[14]

どちらも茶の湯と関わりが深い用例である。しかも、茶の湯における評価の語として用いられている。その点で先の「しほらし」の例も共通している。

「しほり」と茶の湯の関連については、すでに赤羽学が芭蕉において指摘している。赤羽は芭蕉の「しほり」の根底となる「しほれ」が茶の湯の「しほらし」に原因していると考えている。[15]

赤羽の指摘にもあるように、「しほらし」が茶の湯に見られるのは、武野紹鴎からである。紹鴎遺文「又十体之事」に、

目聞
茶の湯道具の事は不及申、目にて見る程の物の善悪を見分、人の調る程の物をしほらしく数寄に入て好事、専也。[16]

この例が、世阿弥の『風姿花伝』における

薄霧の籬の花の朝じめり秋は夕と誰か言ひけん
色見えで移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける

の歌の趣にたとえられる貴族的な「しほれたる風体」が、やがて連歌の影響を経て、「茶の湯」をきっかけとして近世的な庶民的美へと転換するというのが赤羽の主張である。さらに、紹鴎は、

数寄の道は只慰みを本意とする事なれば、閑に手前しをらしくきれいにたてなす事専也。能々稽古あるべし。
（「生島宛伝書」赤羽学論文による）[17]

と「しほらし」を手前の理想的在り方ともしているのである。

また、村田珠光を継いだ宗珠なども「桟敷へ入次第之事」の中で、

何れも床に絵などかゝり候時も、一度に床のきはへより候へば、しをなく候ゆへ、床のまへのたゝみの上へ二度によりたる事しほらしきよし。[18]

と述べている。これらは、金春禅鳳『禅鳳雑談』に、

一、同（永正九年）十一月十一日、坂東屋に被留候。雑談に、うたひはすげなく候てはあしく候。にほひの候て、しほら敷、ぼけやかなるがよく候。さのみきれいすぎ候て、まっしろなるもいやにて候。

一、同年（永正十二年）ノ卯月四日ノ夜、禅鳳来臨候て雑談有。水屋神楽見物之由候。

舞おさめのあふぎ、さきあがりにてわるく候由候。あふぎ舞さげ候てよく候也。舞おさめがはやくなり候ほどに、しほらしく、よつぼどに舞おさめ候てよく候也。[19]

とあるように、能楽に影響を受けてのことと考えられる。これら赤羽学の紹介した資料以外でも、茶の湯と「しほり」の関係の深さを示す例がいくつか見られる。

そして、武野紹鷗の「しほらし」が利休の時代にも受け継がれていたことは『山上宗二記』からもわかる。先の「又十体之事」に倣って、山上宗二は「茶湯者覚悟又十体」として、

一　目明

茶湯道具ハ云ニ不及、何ニテモ、見ルホトノ物善悪ヲ見分ケ、人ノ誂物ヲシホラシク数寄ニ入テ始事専一也、目利ニ嫌フハ、ムマキニ似ル物ヲスク目利ヲ嫌フ也、[20]

という一項を定めているのである。その武野紹鴎の「しほらし」の根底には連歌の影響もあったことは、同じく『山上宗二記』の次の「茶湯者伝」の部分からうかがえる。

一　古人ノ云、茶湯名人ニ成テ後ハ、道具一種サヘアレハ、侘数寄スルカ専一也、心敬法師連歌ノ語曰、連歌ハ枯カシケテ寒カレト云、茶湯ノ果モ其如ク成タキト紹鴎常ニ云ト、辻玄哉云レシト也、但、茶湯風体年々珍敷クカハルヘシ、先達ニ可習也、[21]

『山上宗二記』（天正一六年ごろ）は当時写本でしか伝わっていないが、利休の高弟であった山上宗二の存在を考えると、江戸初期にあってもその本は流布していたであろうことは充分に考えられる。そのことは、利休の茶の理念を直接に表現している部分ではないが、『利休茶湯書』（延宝八年刊）に

一　炭の置きやうの事一ツ有、五徳の所あいしらい習也、……先初心の時ハ大方よこに置にもすぢかへておくにも、いろりの内、炭の筋とをりたるやうにをくへし、上のあしらいにてしほらしくなるやうに心もち能なり、是も委く書付がたし、[22]

とも見え、「しほらし」が茶の湯用語としたある程度定着していたことを伺うことができる。

さらに、利休自身の言葉としては、

数寄道はりこうになく、ぬるくなく、只取りまはしの奇麗なる様に、たしなむ事肝要也と紹鴎老宣ひ候也。枯木の雪におれたる如く、すねすねしく手前の中に、またしほらしきこうをなす事、成りがたき物にて侍り、よくけいこすべし。「天正九年野村宗覚宛・天正一三年ハイフキヤ常徳宛伝書」[23]

という例もある。

この例については、筒井紘一が「江戸前期の写本と考えられる本書は、現存する利休伝書のなかでも白眉の書」として紹介している『天正九年紀銘伝書』では、

一、数寄の道に手前のきれいなるやうニたしなミ□（老か）ノ枯木の雪ニおれたることくすねすね敷、手前の中ニ又しほらしき様に難成キもの也、能けいこすへし[24]

ここからも、「しほらし」は、利休の茶の湯の流れのなかで、すぐれた茶の湯のあり方を評価する語として存在していたことがうかがえよう。そして、利休自身の美意識として「しほらし」が見られたことは、『南方録』滅後の

道具ノ似合タルガヨキト、休、常ニノ玉ヘリ、休ハ大男ナルユヘ、イカニモシヲラシク小形ナル物ガ似合タリ

にも伝えられている。[25]

茶の湯の側から「しほらし」をとらえたとき、どのような意味となるかは、これまで見てきた茶書の用例にたいする諸氏の定義を示すことで理解が容易になると思う。「紹鷗遺文」の「しほらし」については、西堀一三が「その内容は、物の萎れるに似た姿を考えることで、完全にして結構な姿を思うよりも、むしろ吾身を鈍なりと思う心によつている。そうであればこそ更に自ら完成しようという悲願ともなるであろう。その悲願を心に持つている姿がこの『しほらしく』である。」[26]と述べている。「利休伝書」については、堀口捨己は「共にやさしくつつましやかなことで、枯木の雪に折れたごとく、すねすねしい中に、また、やさしくつつましやかな効を、茶の手前として、現に表わし出すことであった。」[27]としている。

実際、西鶴の用例と比較して見ても、それらの定義と重なる部分が多い。西鶴も利休の「わび茶」の実現された姿を形容する語として「しほらし」を受けとめていたと考えてもよいのではなかろうか。「唐物荘厳」の時代から脱却し、やがて珠光・紹鷗・利休により示されていった「わび」茶の湯の世界を形容する語として「しほらし」は用いられた。同様に西鶴も茶の湯の理想的あり方に「しほらし」を用いたのは、おそらく「わび茶」の茶の湯になんらかの理解を持っていたためであろう。西鶴への茶の湯の影響は吉江久彌もすでに示唆するところである。[28] 赤羽学も指摘するように「しほり」へ至る前段階として、茶の湯の「しほらし」の影響を考える必要性があることは、西鶴の例を見ても明らかなのではなかろうか。

このように見てくると、「しほり」の語源が「萎る〈しをる〉」にあるとだけ限定するのは無理があるようである。しかし、小学館『古語大辞典』などでは、「しほり」の項はとっているものの、「しほらし」の項は立てていない。そして、「しをらし」を動詞「しを（萎）る形容詞化」と規定してしまっている。こうした「しほらし」の処理のあり方には、大いに問題があると考える。これまで検討してきたように、「しをらし」と「しほらし」が表記のうえで明確な識別ができない場合、文脈に照らして、どちらの意味で使われているかの検討をしていくべきである。そして、その場合は、たんに前後の文脈のみならず、表現されている内容の文化的背景にまで目を配るべきである。とするならば、茶の湯の場面と関連して「しほらし」が使われている場合、「遠慮深くて奥ゆかしい。控え目で慎み深い。」「風情がある。優美だ。」（小学館古語大辞典）や「上品な魅力を持つこと」（小学館新編日本古典文学全集）[29] といった意味として処理してしまって、はたしてよいものだろうか。先の『利休茶湯書』の「いろりの内、炭の筋とをりたるやうにをくへし、上のあしらいにてしほらしくなるやうに心もち能なり」という部分や利休の「枯木の雪におれたる如く、すねすねしく手前の中に、またしほらしきこうをなす事、成りがたき物にて侍り」の言葉からも、「しほらし」には「控え目ななかにもしっかりとした信念が徹っている」という要件が求められるのではなかろうか。とするならば、遊女吉野と高橋の手前には、「しほらし」と批評が加えられたものの、コの井筒の手前については、「やさしき手前」としているのも首肯できる。井筒のここでの茶

の湯は「茨木屋の奥座敷」で「気の付きたる道具かざり」でなされた「当座発句」をなすような茶の湯であり、わび茶を志向したものではなかったからとも言えよう。さらに、ケに続く場面で、井筒が世伝に廓を出た事情を「上代やう文」で「此度の首尾の別れ、よしみ迚、申残す、しほらしき届」として書いたことを述べている部分と比較しても、ただ「優美」「上品」といった意味とは異なって使われていることが指摘できる。そのことは、オの猿が人まねをして懸命に茶を給仕してくれる場面でも、「おかしき中にしほらしく」と表現していることからも、どこか「一貫性を持った控え目さ」と茶の湯の接点を考えた場合、そこには「わび茶」の姿勢が浮かんでこよう。遊芸としての茶の湯から精神性を求めた茶の湯への転換こそが、「わび茶」の意義である。とするならば、「わび茶」を体現するものへの評価として「しほらし」は用いられる側面を持ったのではなかろうか。「奥ゆかしい」という意味をさらに深めて、「ひたむきなまでの控え目さ」によってかえって導き出される「上品さ・雅やかさ」を持つ人や物への賛辞として、この語は用いられた推測できる。西堀一三も、先の『南方録』を受て、紹鷗の時代には「社会的関心を離れた人間が『正直につつしみ深くおごらぬ様』をもつことの風態とされた」「しほらし」が、利休に至って「大なるものの傍に小なるものがある形式に『しほらし』があるとされるようになった」と述べ、「しほらし」が茶の湯の取り合せのなかで論じられてくることを指摘している。[30] この「対比」に注目する指摘は、示唆深い。それは、西鶴もやはり「対比」を強く意識した「しほらし」の使い方をしていると認められる例が、茶の湯と関わりのない場面でもみられるからである。

三、西鶴の「しほらし」

これまで、「しほり」が茶の湯と関連していると思われる部分を検討するなかで、「しほらし」が「一貫性を持った控え目さ」や「ひたむきなまでの控え目さ」から醸し出される「上品さ・気品」を示す語としてとらえられる

のではないかという考察をしてきた。次に、それをふまえたうえで、西鶴の「しほらし」の表現としての扱い方の特色を他の用例についても検討していくことによって考えていこうと思う。

ここで、西鶴の「しほらし」を考えるために、いま一度「しほらし」の語の意味についての現在の一般的なとらえ方を整理しておく。

まず、小学館『日本国語大辞典』「しおらし」の項では、

① 上品で優美な様子である。
② ひかえめで従順な様子である。
③ かわいらしい。可憐である。
④ けなげな様子である。感心である。殊勝である。相手をみくびって言うこともある。

というように、その意味を分類している。この分類にたいしては異論もあるとは思うけれども、ここでは、便宜上この分類を基本的な意味の枠組としておく。

次に、当時の「しほらし」の一般的理解をさぐるために『日葡辞書』を見てみる。それによれば、「シヲラシイ」（しほらしい）は、

ちょっと塩気があって味のよいもの。また、比喩、身のこなしや言葉つきなどに愛嬌のある（人）。
「シヲレ・ル・レタ」
しなびる。凋む。またはかわき枯れる。
また、比喩、恐れや悲しみなどのために、元気がなくなってしょんぼりする。[31]

となっており、やや、西鶴の「しほらし」を考えるうえでは意味の隔たりがあるようである。ただし、後にも述べるが、「また、比喩、身のこなしや言葉つきなどに愛嬌のある（人）」の指摘は、西鶴の「しほらし」を考えるうえで注目しておくべきであろう。また、「しほらし」は貝原好古の『諺草』（元禄一二年刊）によれば、次のように定義されている。

鹽らし　俗に人のみやびやかなるをしほらしと云。みにくゝいやしきをぶしほと云。
（無鹽女の故事を引き。）
是故事に據て、日本にも無鹽、塩らしなど云俗語あるにや。[32]

この貝原好古の定義の方が、むしろこれまで茶の湯の関連で見てきた西鶴の使った意味に近いといえ、現在の意味として代表的理解といえる①の意味もこちらの語義の伝統によるものといえる。

また、西鶴にかぎった「しほらし」の定義としては、杉本つとむの『西鶴語彙管見』に、

しおらし（形　しほらし）
かわいらしい。ひかえめでつつしみあり、いかにも女らしいようすにいう。[33]

とある。これは現在の意味の③と②につながるものと考えられよう。また、乾裕幸は、

穏順・柔順、或は無技巧、或は上品といったような意味に用いられている。しかも、以上のしをらしと評された総ての句に共通するものは、この穏順・上品という性格にほかならない。それは露骨・野卑に対立する概念として、物の姿の愛憐を基調としつつ、蕉風俳諧の「しをり」に流れ込んでいくのである。[34]

と俳諧での使われ方をまとめている。これは、先の①に②が加わっている意味としてとらえられる。

こうして「しほらし」の意味を整理してみると、およそ二つの流れになりそうである。そして、それについては、真下三郎の指摘が興味深い。真下によれば、「しほ」に「らし」がついた語が「しほらし」であり、その使われ方は遊女評判記を中心に「色気のある愛嬌」を形容する語であり、のちにそれが「優しさ」にまで意味が拡大していったというのである。そして、延宝を過ぎる頃から次第に使われなくなり、やがて「神妙なり」「可憐である」という意味に変化していくという指摘である。[35]

こうした「愛嬌がある」の意味は『日葡辞書』の指摘と重なり合う。もう一方に「上品・優雅」という意味があることは『諺草』の例などから指摘できる。では、杉本や乾の指摘にもあり、現在の「ひかえめさ・穏順」につながる語の意味はどこから派生してくるのであろうか。そのことを考えるために、西鶴の用例を点検してみる。

『好色一代男』

ア　七の五「諸分の日帳」（和州が客の評判をして）

三月四日は、住吉屋長四郎方へ出候、唐津の庄介様、……昼の内はすみよしの汐干に御行、桜貝うつせ貝など、手づから拾ひて『あはぬさきから袖ぬらす』と、しほらしき御人にて候、

『好色五人女』

イ　五の二「もろきは命の鳥さし」

里は冬がまへして、……一かまへの森のうちにきれいなる殿作りありて…すこし左のかたに中二階四方を見晴し書物棚しほらしく、爰は不断の学問所とて是に座をなせば、〈『日本国語大辞典』は①の用例としてこれをとる〉

『男色大鑑』

ウ　七の五「素人絵に悪や金釘」

日も昼にさがり、淡路島に影移るを惜まれ見しに、松影にきて鬢の厚き男立合て、沓の音しほらし、昔日光源氏住吉詣の時此浜にてあそばしけるとなり。

『武道伝来記』

エ　一の二「毒薬は箱入の命」（奥州福島藩の橘山刑部の家での話）

それより冢の夜になりて此御家の作法を覚えたる老女花餅のしほらしく作りなし、上へあげて下まで祝ひぬ

『世間胸算用』

オ　三の三「小判は寝姿の夢」（ある貧しい男が妻を奉公に出したところ、人から噂されて）

さきの旦那殿がきれいなる女房をつかふ事がすきじやことに此中おはてなされた奥さまに似た所がある本にうしろのきのしほらしき所が其まゝ」といへば、

『西鶴名残の友』

カ　一の一「美女に摺小木」（伊賀上野の正道という俳諧師の妻が幻の美女を見咎める場面）

奥座敷をたづねしにすずしの蚊屋に朝顔を縫はへ、夏ぶとんは紅井の地紋に桐からくさしほらしく、房付の枕にすき髪をうちかけ、年の程四十にあまれる女らうながら、さかりといはゞ今なり

これらア～カの六例は「上品・優雅」の意味としてとらえられよう。それにたいして次のような例が真下の指摘する例に該当するかと考えられる。

『好色一代男』

キ　二の六「出家にならねばならず」（江戸の香具売の描写）

十五六なる少人の、との茶小紋の引かへし、かの子繻子の、うしろ帯、中わきざし、印篭巾着も、しほら

しく

ク　三の七「口舌の事ぶれ」（水戸の本町の遊女の描写）

物さびしき、あしたは御蔵の籾挽とて、やとはるゝ女有ぞかし。……しほらしき女は、大形知音ありて、そこをたよりぬ。

『諸艶大鑑』

ケ　七の三「捨てもとゝ様の鼻筋」

此前小ざつま、久宝寺の四の二と云男ふり掛て、俄にお中がいたむとてしかみ顔、その色もかはらず、いたひ顔つきは見へずして、次第に薄みつちやもしほらしく、唐土の西子が、美なる面影も思ひ合、是傾国の稀者と詠めしも、うそとおもへばをそろし。

コ　七の五「庵さがせば思ひ草」

朝夕の新町よりはと、乳守にさそはれ、……ここの四天王、市橋小沢の胸の疵も、義理の首尾とてしほらしく、残らずかりて、兎角は夜ともに呑みあかして、

『好色五人女』

サ　三の一「姿の関守」

十五六にはなるまじき娘、……さては縁付前かと思ひしに、かね付て眉なし。顔は丸くして見よく、目にりはつ顕れ、耳のつきやうしほらしく、手足の指ゆたやかに、皮薄ふ色白く衣類の着こなし又有べからず、

シ　三の二「してやられた枕の夢」（茂右衛門がりんの身代わりにおさんをものにする場面）

七つの鐘なりて後茂右衛門下帯ときかけ闇がりに忍び夜着の下にこがれて裸身をさし込…袖の移香しほらしやと又寝道具を引き着せさし足して立ちのき

ス　五の二「小歌の伝授女」（一夜を銀六匁で呼べる伝授女についての描写）

されども菓子には手をかけず盃をあさう持ならひ、肴も生貝焼玉子はありながら、にしめ豆山椒の皮など

はさむは、色町を見たやうにおもはれてしほらしければ、

『好色一代女』

セ　一の四「淫婦の美形」（遊女の手管として）

其折を得て紋所をほめまたは髪ゆふたるさま、あるひははやり扇何にてもしほらしき所に心を付、

『男色大鑑』

ソ　一の四「玉章は鱸に通はす」（出雲の増田甚之介が男色のための果たし合いに出かけるときの描写）

甚之介装束は、浮世の着おさめとてはなやかに、肌には白き袷に、上は浅黄紫の腰替りに、五色の糸桜を縫せ銀杏の丸の定紋しほらし、

タ　六の二「姿は連理の小桜」（上方歌舞伎の名手小櫻千之介の描写）

鳥足の高木履其身は紙子にさまざまの切接にくからぬ模様「此子なればこそ着もすれ末々の女方着て似合ふまじき」とはや西二軒目の桟敷より物馴共沙汰し侍る、首に懸たる扣鐘の音迄もしほらしく

チ　八の一「聲に色ある化物の一ふし」（京の女形藤田皆之丞の描写）

風俗、地衣装の外替りて、黒羽二重に白小袖かさねて見る事もあかず、一度に肌着も十の数を拵ゆる事今の勤め子のせぬ事なり、是みな小平次が実ごとなる物ずき、川原の水ぎわ立ちてしほらし、

ツ　八の三「執念は箱入の男」（上方の若女形竹中吉三郎の描写）

先竹中は、浅黄かへし下着に中は紅鹿子うへは鼠しゆすの紋付、白らしやの羽織に小鳥づくしの唐衣の裏を付、八所染の胸紐ときて白糸の長柄ぬき出し、ひだりすこし身をひねりて座して、笑へる口もとのゆがむになをしほらし、

テ　八の五「心を染し香の圖誰」

袖嶋市弥川嶋数馬桜山林之助袖岡今政之助三枝歌仙など、うつくしきがうへに女のごとく紅井の脚布する事恋をふくみてしほらし

『好色盛衰記』

ト　三の四「腹からの帥大臣」

いつぞのほど、江戸の勝山が「押へます」といひはじめて、呑よし、其後京の三夕が「さはりましよ」といひけるは、更にまたしほらし、それより大坂の大和「是はすこししめしましよ」といへるは、なをまた座興なり、

このキ～トの例は、登場人物の外見を批評した語として「しほらし」が使われている例である。とくに『男色大鑑』の例などは、真下三郎の指摘にもあった遊女評判の用語としての「しほらし」を引き継いでいるものと思われる。では、次のような例はどう考えていくべきであろう。

『好色一代男』

ナ　三の五「集礼は五匁の外」（寺泊の遊女の描写）

新しき薄縁敷し、奥の間にやさしくも、屏風引廻してありける、…女郎は箸もとらず、上方のこと、誰がいふて聞しけるぞ、しほらしきと思へば、油火指にてかゝげ、それをすぐに小鬢につけしは、笑はれもせず、

ニ　五の三「欲の世の中に是は又」（室の津の遊女の描写）

酔ざましに千年川といふ香炉に、厚割の一木を焼て、きかせけるに、こゝろもなく、そこそこに取りあげてまはしける、いとはしたなし、末座にまだ脇あけの女、さのみかしこ顔もせず、ゆたかに脱懸して、肌帷子の紋所に、地蔵をつけて居るこそ、いかさま子細らしく見えける、手前に香炉の廻るとき、しめやかに聞とめ、すこし頭をかたふけ、二三度も香炉を見かへし、「今おもへば」といふて、しほらしく下にをきぬ、

……昔はいかなる者ぞとゆかし、世之介此女の心入をおどろき、様子をきけば、隠れもなき人の御息女なり、

ヌ　八の一「らく寝の車」（石清水への参詣の途中、小井田の道橋の詰での島原の太夫たちのもてなしぶり）

夜寒のもてなしに、京よりいくつか、蒲団もたせて、草の戸の内に、置火燵を仕懸、……銀の燗鍋に、名酒の数々、木具ごしらゑの茶漬めし、雁の板焼に赤鰯を置合、しほらしき事どもありて、跡はめいめい呑みの色服紗、呑みすての煙草盆、いづれか、のこる所もなし、

ネ　八の四　「都の姿人形」（長崎丸山遊廓での世之介の感想）

「我京にて、三十五両の鶉を焼鳥にして、太夫の肴にせし事も、今此酒宴におどろき、風俗も替りて、しほらし。」と誉れば、

『諸艶大鑑』

ノ　一の四「心を入て釘付の枕」（薄雪を迎えにきた角助の袖から香のかおりがただよう。）

むくつけなる下男の、あらいもやらぬ鬢の匂ひ、薄雪さまにきかせましてはと、しほらしき心ざしから、伽羅に身をなし候」と申せば、太夫いとゝ不思議に思る、

ハ　八の三「終には掘ぬきの井筒」

上代やう文取出して、「此度の首尾の別れ、よしみ迚、申残す、しほらしき届也。鮫屋書物屋のある橋筋のにしへ、引取」と言へば、

『俳諧女歌仙』

ヒ　虎女

富士は江戸よりの蓬莱山君か代の久しき松のすゑすゑ迄けふの春をいはふは女心のしほらしく幾年か初発句より四季の折々をわすれずつかふまつる。

とし徳のかもしおはすをかさり物

フ　一入娘

紀州藤代の女也、所から和歌の浦に心をよせ、書とめし藻塩草是を聞折にふれて都の句帳にしほらしき作を見せける、

ぶりぶりや神のちからの玉津嶋

『好色五人女』

へ　二の二「分里数女」（端女郎の手管として）

女郎寝てしばしは帯もとかず手をたゝきて禿をよび「其着物お跡へむさくとも着ませひ」といふしほらしく、扇に心をつけ、「此袖笠の公家は、さの、わたりの雪の夕暮で御ざんすか」など問ふより、

ホ　三の四「金紙乞髻結」

二月二日に曙はやく其御屋形にまかりしに、奥さまは朝湯殿に入らせられ、しばらくあつて自をこぶかき納戸にめさせられ御目見へいたしけるに其御年比はいまだ廿にもたり給ふまじさりとてはやさしく、御ものごししほらしく「又世の中にかゝる女臈もあるものか」と女ながらうらやましく見とれつるうちに（杉本つとむの用例）

マ　六の一「暗女は昼の化物」（暗物女の宿の描写）

振り袖は着ども年は二十四五ならめ、是程の事はしるべき物をとふびんなり、きどくに座敷をいそがぬは四匁が所と思ふにやしほらし、

『本朝二十不孝』

ミ　四の三「木陰の袖口」（越前国の榎本万左衛門が妻に先立たれ）

此里艶しくも是をいたはり色々此子の人なる事を申ぬ、折ふし庄屋の広庭に女計茶事して集まりしが此中に似合敷後家有ていづれも取持、かるがる敷縁組を急ぎぬ、此女房見ぐるしからず、然もしほらしき心底夫婦の取組悦に非ず、

『男色大鑑』

ム　一の四「玉章は鱸に通はす」

……かゝるはげしき場にして、その身は深手もおはず、又ためしもなき若武、いづれも袂を泪になさぬは、

なし。此寺にて伊兵衛一身の死人を、念比に弔ひしは、猶しほらしきこゝろざしとぞ沙汰せり。

メ　四の二「身替りに立名も丸袖」（金沢近くの農村で竹嶋左膳と野崎専十郎が）
立ちながら、「二世ぞ」と詞をかため帰りければ、南請の里の屋に名月をしるもしほらし、塩煎の芋に口欠の徳利、かほりは流石菊といへる山路酒、

『懐硯』

モ　一の五「人の花散疱瘡の山」（戸塘専九郎が鎌倉で大谷左馬之丞と出会う場面）
其中に色形すぐれ此生れつき鄙の都は是なるへしと人の機をうばふ美少年、……左馬之丞見て「まことに賤しきもの」とあれば還而しほらしき心底感じ入、返事してそれより深き契約となりぬ、

『武道伝来記』

ヤ　三の四「初茸狩は恋草の種」（作州津山の沼菅半之丞の念者として）
其男は本町二町目能登屋藤内とて名を得し六方のかくれなく、…「心底のいさぎよき男、町人にはしほらしき」と思ふ折から御姿を見初、「一命を御返事なき先に参らせたる」よりかはゆがらせられ此三年の念比ぞかし、

『日本永代蔵』

ユ　二の一「世界の借家大将」
座敷に燈かゝやかせ、娘付置「露路の戸の鳴時しらせ」と申置しに、此娘しほらしくかしこまり、灯心を一筋にして、嚏の声する時元のごとくにして勝手に入ける、（『日本国語大事典』で②の用例とする）

『好色盛衰記』

ヨ　四の三「情に国を忘れ大臣」（藤屋金吾の描写）
生玉の竝松筋より横ぎれに、里の屋づゞきの塩町を行くに、是はなんともならぬ美形、人に見られたき風情もなく、成程かまはぬあゆみぶり、なをそれが目にとまりぬ、肌に白じゆす、袋ぬいの小袖着て、中にむ

らさき鹿子の両面、うへに紬の浅黄染に、ともいとの縫紋、こたつに房付まくらふたつならべたる、悪ひほどしほらし、……「京の衆か」と問はせければ

以上のナからヨまでの一八例が、先の西鶴頃までの意味分類からは出てこない例と考えられる。そして、そのなかには、「しほらし」が容姿の形容から心のありようの批評へと内面に変化していくという真下三郎の説に該当するものもある。ノの「しほらしき心ざし」やヒの「女心のしほらしく」というように「心」の評価語として用いられている「しほらし」は、「可憐」へとつながるものと考えられる。ナノハヒヘホマミムユがそれに該当するのではなかろうか。また、ユの例などは「従順」の例として扱われるべきものであろう。このように整理すると西鶴の語彙においての「しほらし」には真下三郎の指摘にあった「しほらし」の使われ方の変化の過渡期としての特色がよく出ていることがわかる。

さらに、これらの例をみていくと、もう一つの特色が目につく。ニヌネフメモヤヨのように「京」にたいしての「鄙」の「みやび」を表わす場合に「しほらし」が使われていることである。先に茶の湯との関連から指摘した「しほらし」の意味に通じているともいうべき使われ方である。ニヌネのように「都鄙」を意識して使われている場合やモヤのように「貴賤」を意識して使われている場合もあるが、その使われ方は、先に西堀一三の指摘にもあったように紹鷗の理念が利休の道具の取り合せに展開したとき、「しほらし」は「対比」という表現によって示されるようになっていく。ここでの西鶴の「しほらし」の例も、「対比」を含む傾向があることに注目すべきであろう。しかも、その対応関係は、「ひなび」と「みやび」であり、「賤しさ」と「貴さ」となっているのである。

たとえば、ニの『好色一代男』五の三「欲の世の中に是は又」を典型として取りあげてみよう。ここでは、室の津の遊女と世之介のやりとりを描いている。世之介が、室の津で、酔余の座興として香をたくけれども、周囲の遊女の反応はにぶい、せっかくの名香にも、「酔ざましに千年川といふ香炉に厚割の一木を焼てきかせけるに、

こゝろ　もなく、そこそこに取りあげてまはしける、いとはしたなし。」というありさまである。しかし、そんな遊女のなかにも、「末座にまだ脇あけの女、さのみかしこ顔もせず、ゆたかに脱懸して、肌帷子の紋所に、地蔵をつけて居るこそ、いかさま子細らしく見えける、手前に香炉の廻るとき、しめやかに聞とめ、すこし頭をかたぶけ、二三度も香炉を見かへし、『今おもへば』といふて、しほらしく下にをきぬ」という者が現われる。昔、江戸の吉原の若山にもらったという備後福山の客が薫き込めていたこの名香をきいたことがあるというのである。世之介は、その反応ぶりに驚き、「昔はいかなる者ぞとゆかし、世之介此女の心入をおどろき、様子をきけば隠れもなき人の御息女なり」という結末になる。

ここでの「しほらし」はどのように機能しているのか。前半の「鄙」の遊女たちの不風流な反応に比較して、「脇あけの女」の反応がとても丁寧であり風流をわきまえているように世之介には見えたのである。その評価が「しほらし」となって述べられる。この例などからもわかるように、貝原好古らの言う「上品でみやびやか」な状況のみを示しているのではないようである。

室の津の風流を解さない遊女たちのなかにあって、都の遊女を思わせるふるまいに西鶴は「しほらし」の評価を与えている。「しほらし」は、どうもこうした「鄙」ではあるけれども「雅び」を体現したような場面に用いられているようである。実際、先の用例にあってはいわゆる京・大坂、すなわち「都」を離れた「鄙」の環境にあって発せられているのである。

それは、ネの「都の姿人形」の長崎での宴の様子を、

「我京にて、三十五両の鶉を焼鳥にして、太夫の肴にせし事も、今此酒宴におどろき、風俗も替りて、しほらし。」と誉れば、

としていることやヨでも藤屋金吾を描写するなかで、「悪ひほどしほらし」としたあとで、「京の衆かと問」わせ

ていることなどからもうかがえよう。モの「人の花散疱瘡の山」にいたっては、大谷左馬之丞を「此鄙の都は是なるべし」と評価している。そのうえで「まことに賤しきものとあれば、還而しほらしき心底感じ入」と描いていることからも、「しほらし」の対比がもたらす意味の創出を指摘できよう。

そしてこの例などから、「賤しさ」のなかに「貴さ」をみとめた場合にも「しほらし」の評価を用いたことをも結びつくことが指摘できる。ノで薄雪を迎えにきた角助の袖から香のかおりがただよう子細を、やり手久米が、薄雪に報告する場面でも、

　むくつけなる下男の、あらいもやらぬ鬢の匂ひ、薄雪さまにきかせましてはと、しほらしき心ざしから、伽羅に身をなし候」と申せば、

となっていることや、モやヤの例とも使われ方のうえで同様と考えてよいと思う。

このようにみてくると、どこかに不完全さを秘めつつ「雅び」が実践されている状況を見たとき「しほらし」の語が発せられているようである。ヌの「らく寝の車」で世之介が石清水への参詣の途中、小井田の道橋の詰で島原の太夫たちが「草の戸の内に、置火燵を仕懸、……銀の燗鍋に、名酒の数々、木具ごしらゑの茶漬めし、雁の板焼に赤鰯を置合」た様子を「しほらしき事ども」と評価していたり、モの「身替りに立名も丸袖」で金沢近くの農村で竹嶋左膳と野崎専十郎が二世の約束をした後、「南請の里の屋に名月をしるもしほらし」と描かれているのも、茶の湯の場面とはなっていないものの、「わび茶」の雰囲気を伝えている場面に用いられている「しほらし」といえよう。とくに、ヌについては直後の「めいめい呑みの色服紗・呑みすての煙草盆」とあるから茶事の雰囲気が強く感じられる。

茶の湯と「しほらし」の検討部分でも述べたように、「しほらし」と「わび」の理念はここでも不可分であるといえる。つまり、「鄙」の環境における「雅び」の実現こそが、「わび茶」の実現でもあるからである。そして、

江戸初期にあっては、この「わび」の実現ということが、かなり大切にされ、美的空間の成立に多大な影響を与えていたようである。

そのことは、たとえば江戸初期の大名の庭園の沿革と比較してもわかる。白幡洋三郎は、

初期の大名屋敷の庭園は、茶事を楽しむにしても山中の谷川の水を汲む趣向を取入れたり、山間のわびしい茶屋を舞台として行うような装置だった。……大名屋敷の庭園は山中、山里、あるいは渓流、深山といった表現が頭に浮かんでくるような雰囲気を色濃く備えていた。大名屋敷の庭園は、「わび茶」や「草庵の茶」の観念にしばられていたともいえるだろう。[36]

と指摘する。大名庭園も江戸初期にあっては、現在の私たちの見る回遊式の庭園ではなく、「わび茶」実現の場として作られていたというのである。

当時のこうした「わび」志向の風潮にあって、それを見事に体現した場合に与えられた評価、それが「しほらし」であったとすることはできないだろうか。そうすれば、先の遊女吉野や高橋の茶の湯の手前を「しほらし」としたことも整合する。西鶴は「鄙」の環境のなかに「雅び」やかな風情を失わないという「わび茶」の理念を実現したときの美しさを、「しほらし」としてとらえ、その語を用いて評価したのではなかろうか。とするならば、「しほらし」は、たんに「みやびやかさ」への賛辞にとどまるものではなく、より複雑な、語としての意味の広がりを持つものとして見なおすことが可能になるであろう。先の用例も、この視点から読みなおすとき、「鄙びた所にあるものの、ひたむきな控え目さがあり、それが雅びな感じを醸し出す」とか、「雅びやかさのなかにも一貫した落ち着きがある」といった解釈が可能となる。そして、その解釈はたんに辞書的な意味を融合した解釈を超えるものと考える。なぜなら、それは、西鶴が「対比」の構造を使って表現しようとした、個々の場面の意図をより忠実に読みとることを可能とするものといえるからである。

四　おわりに

芭蕉の俳諧と「しほり」については、先学がさまざまに定義していることは始めに述べたとおりである。西鶴の散文での用例を検討してくると、批評の語としての「しほらし」は、「わび」の美の実現がなされたとき発せられているようである。そこで、「わび」とは何かが問題となろうが、ここでは敷江教一の見解を示しておく。

わびの美が感覚に直接に訴えるものでない以上、先きにもふれたように、その美をつくりだす心の素地のほうが問題になる。その心の素地とは、具体的にいえば、ある限定された色彩のうちに、無限の色彩の多様性を見出しうる力のことであり、同様にある限定された形のうちに、無限の多様性を見出しうる能力のことである。わびの美は、普通解釈されているように、不完全な美とはむすびつかない。それはまさしく無限定の美と呼ばれなくてはならないものなのだ。

そうすると、美意識あるいは美の概念としての「わび」は、きわめて主観的な傾向の強いものとなるが、なおそれが主観的な普遍性を主張しようとすれば、「心の下地」という共通の地盤を固めるよりほかない。[37]

これが、まさしく珠光が「藁屋に名馬繋ぎたるがよし」(『山上宗二記』)と述べた世界とつながると言えよう。「鄙」という限定のなかで無限の「雅び」を感じさせることができる「心の素地」を「わび」としたとき、それが実現されるようすを「しほらし」と西鶴も評価したのではなかろうか。

さて、ここで冒頭にかえって、西鶴の「しほらし」と評した句にたちかえってみよう。

『西鶴評点湖水等三吟百韻巻断巻』にある「いかりをうつてかゝる波きは」にたいする「しほらしくあそはし候」は、どこに由来するのだろうか。先のチの「川原の水ぎわ立ちてしほらし」とも似ている風情である。とするならば、「しっとりとした美しさ」の用例と捉えられるのではなかろうか。また、『西鶴評点政昌等三吟百韻巻』

の「白むくや着断に餘る袖の雪」の場合の「しほらしき一句に候」は、どう考えられるだろうか。「白無垢」に「白雪」が降りかかり、完全な白銀の世界を作り出そうとするなか、「着丈に余る」という中断が限定を生みだし、その「わびしさ」によって醸し出されたる美の世界は、先の数江教一の指摘する「わび」そのものといえよう。「硯石かすみに流る桂川」の「句からしほらしく候」もまた、墨絵のような色彩の控え目さから醸し出される優雅さを讃えているといえる。

また、『西鶴評点山太郎独吟歌仙巻』の「明衣ながらの袖の夕ざれ」への「俳作しほらしく候」の評点は、今回、検討してきた「鄙」の中での「雅び」を受けている評といえよう。この句が「駒とめて袖うちはらふ陰もなし佐野の渡りの冬の夕暮れ　新古今　冬六七一　藤原定家」を本としていることは明白であろう。とすれば、「明衣・ゆかた」でありながら「雅び」を実現していくようすを、「しほらし」として西鶴がとらえていたことにはならないだろうか。

『西鶴評点歌水艶山両吟歌仙巻』の「常にはならぬ御筆の跡」への「しほらしくあそはし候　是四句目ふり也」の「四句目ぶり」は、乾裕幸のいう「無技巧」にあたり、無作為がもたらす情趣を評している。『江戸点者寄会俳諧』での「硎釘の嫉やふかき花の艶」を受けての「あはれ燕のちきりぬすみし」の句と「心の慳疎百千の岩」に続く「やさしくも母虎の子をくはへきて」の句に付けられた「しをらしくあそはし候」の評点の「しをらし」は、「哀憐の情」を中心とした蕉門のそれに近いものと考えられる。

俳諧の評語としての「しほらし」と散文の意味が必ずしも一致するわけではないので、こうした解釈が成立するかどうか、疑問も残るところではある。それを承知の上で試行的解釈をした次第である。

このように、西鶴の「しほらし」は、必ずしも蕉門の「しほり」と一致するものではない。それは、ただ「上品さ」にたいして特別の意味もなく使われているものもある。また、遊女評判記で使われてきた「色気のある愛嬌がある」の意味に用いられている場合もある。さらに、「可憐」「従順」の意味で使われ、やがて「しをり」へと流れ込んでいく「しほらし」の場合もある。「ひかえめで従順なようす」という意味での「しほらし」の意味

も、西鶴の頃から定着しはじめていくようである。そして、このことは、西鶴の時代がまさに「しほらし」の語の意味の過渡期に当たることを意味しているともいえる。

「上品さ・優雅さ」を示す「しほらし」も「しをり」から由来するのか「しほり」から由来するのか、厳密な意味の使い分けについて考えなくてはならないところである。しかし、表記のうえから見ていくことは、残念ながら、「萎る」と認定できるような例も西鶴では「しほり」と表記されてしまっているから、版下の問題にまで踏み込まなくては解明できない。

ただし、今回の検討を通じて、西鶴が「しほらし」を使う場合、単純に「上品である様子」や「可憐な様子」といった使い方でなく、もっと思想的に背景のある使い方をしていたことが判明したといえる。すなわち、茶の湯の「取り合せ」の賛辞に使われる「しほらし」と同様の傾向がみられるということである。芭蕉だけでなく、西鶴にも「わび」という理念の影響があったということは否定できないようである。そして、そこには「鄙」から「雅び」を実現しようとする「わび茶」の思想が根底にあったのではないかという問題も提起できたと考える。西鶴が活躍した元禄時代が、折しも利休百年忌を迎えようとしていた「利休回帰」の時代と一致しているのは、奇しき因縁とでも言うべきではなかろうか。

〈注〉

1　穎原退蔵「さび・しをり・ほそみ」（昭和一八）『穎原退蔵著作集』十巻　昭和五五・二　中央公論社　五九～八六頁では、〈そのやうな表現をせずには居れない余情の美が、まづ作者の心に感得されて居たからである。さうした心の誠を勉めた場合、そこにはそれに最も相応した表現がおのづから生れねばならない。而して芭蕉の栞は専らこの場合の表現様相として説かれたのである。……而して所謂心の栞たる余情は、連歌・能楽等の萎れたる風体の美を、その伝統として持つものであった。〉と定義している。

能勢朝次「俳諧の美的理念」（『芭蕉の俳論』昭和二三所収）『能勢朝次著作集』第九巻　昭和六〇・三　思文閣出版　一一五～一三六頁では、〈「撓る」は物をしなやかにたわめる意であるから、句の姿にしなやかなたわみを持たせる行き方を、しおりと言ったものと見てよいであろう。……私は詩情の流動する流れかたに美しい曲節が生れるところに、しおりの根源があるのだと考えたい。〉と定義している。

小宮豊隆（伊地知鐵男ほか編　『俳諧大辞典』昭和四九・八　明治書院　二七八頁）は、〈「しほり」は去来の言うように、趣向・言葉・道具などの哀憐であることをいうのではなく、人間なり自然なりを哀憐をもって眺める心から流露するもの、言わば愛がしほりなのである。……単なるリアリズムだけではなく、それに哀憐もしくは愛の裏打ちが必要であることを、注意したものに外ならないのである。その点では、「物真似」と「幽玄」とを一つものにするのでなければ、能として優秀であるとは言えないと考えていた世阿弥の幽玄と芭蕉のしほりとは、互に脈絡するものをもっている。〉

といった諸説を櫻井武次郎「しほり」（栗山理一編『日本文学における美の構造』新装版　平成三・九　雄山閣　二二五～二三八頁）は整理している。

2　尾形　仂「しほり」加藤楸邨ほか監修『俳文学大辞典』　平成七・十　角川書店　三五〇頁

尾形　仂編『別冊國文学№八　芭蕉必携』昭和五五　學燈社　六九～七〇頁には、〈研究史として「しをり」の語源に関しては、これを「萎」あるいは「撓」とみる通説に対し、「湿」とみる説もあるが、それらはいずれも「しをり」を作者の内面にかかわる問題とみる点で共通している。〉とし、〈問題点・展望として「表記の上でも本来「しをり」なのか「しほり」なのか、まだ必ずしも決着をみていない。また蕉風俳論における「しをり」の説の意義については、「姿」や「軽み」の論との相関性について、さらに究明してゆく必要があろう。〉と説明がある。

3　河野喜雄『さび・わび・しをり』昭和五七・一一　ぺりかん社　一三八頁

4　小西甚一「『しほり』の説」『国文学言語と文芸』四九　昭和四一・一一　大修館書店　一～九頁

5・15　赤羽学「しほり・ほそみ」（小西甚一編『芭蕉の本』所収）昭和四五・九　角川書店　八四～一〇二頁

6・12　表章ほか校注訳『連歌論集・能楽論集・俳諧論集』小学館日本古典文学全集　昭和五五・二　二四九頁・二五〇頁

7　安田　章「ハ行転呼音の周辺　―ホの場合―」『文学』四二　昭和四九・一一　岩波書店　九九頁

8　遠藤邦基「しをり」（佐藤喜代治編『講座日本の語彙』第十巻）　昭和五八・四　明治書院　一六四頁

9・34　乾裕幸「蕉風的表現論―姿よりしをりに及ぶ―」『初期俳諧の展開』昭和四三初版　昭和五七・十一再版桜楓社〈『国語国文』昭和三九・七号　京都大学　所載〉　二一一～二四四頁

10　野間光辰監修『西鶴』〈昭和四〇・四　天理図書館〉の影印によって「しほらし」「しをらし」の表記については確認した

11　頴原退蔵校訂『去来抄・三冊子・旅寝論』昭和三四・六　岩波文庫　七八頁

13　浅井了意『東海道名所記』横山重監修　近世文芸資料類従　古板地誌編7　昭和五四・一　勉誠社　三九五頁

14　笹野堅校訂『能狂言』下　昭和二〇・一　岩波文庫　一八〇頁

16　千宗室編『茶道古典全集』第三巻　昭和五二・九　淡交社　二七頁

17　西堀一三『日本茶道史』昭和一五・九　創元社　一四四頁にもみられる。それによると、〈天文一八年　生島助之丞宛〉とある。

18　堀口捨己『利休の茶』復刻版　昭和五三・六　鹿島研究所出版会　二八六頁〈底本は西堀一三蔵江戸時代後期写本とする。〉

19　表章・伊藤正義校注『金春古伝書集成』　昭和四四・五　わんや書店　四三二頁・四三八～四三九頁

20・21　千宗室編『茶道古典全集』第六巻　昭和五二・九　淡交社　九一頁・九七頁

22・24　筒井紘一「利休の伝書」千宗左ほか監修『利休大事典』平成元・一〇　六四〇頁・六〇一頁〈底本は今日庵文庫蔵　書肆風月堂版本〉

23・27　堀口捨己『利休の茶』復刻版　昭和五三・六　鹿島研究所出版会　二八〇頁〈底本は宗覚宛・常徳宛とも、堀口捨己蔵江戸時代後期写本とする。〉・二八六頁

〈筒井紘一「利休の伝書」千宗左ほか監修『利休大事典』平成元・一〇　淡交社　六〇九頁　「佐久間卜齋宛て伝書」〈天正九年　今日庵文庫蔵〉にも同様の記述が見られる〉ことからも、広く利休の言として知られていた可能性が高い。

25　久松真一『南方録』　昭和五〇・五　淡交社　二八四頁

26　千宗室編『茶道古典全集』第三巻　昭和五二・九　淡交社　三一頁

28　吉江久彌「『好色一代男』の粋と構想」『西鶴　人ごころの文学』　昭和六三・五　八四頁には、〈私は西鶴の「粋」が俳諧以外の芸道、特に茶道の精神に多くを負うている様にも思う。……西鶴が虚構した話中の行為が、『南方録』に見える利休の教えの趣旨にあまりによく通じているからである。〉とある。

29 宗政五十緒訳注『西鶴諸国ばなし』　平成八・五　小学館新編日本古典文学全集　一二八頁
30 西堀一三『日本茶道史』昭和一五・九　創元社　一八八頁
31 土井忠生ほか『邦訳日葡辞書』昭和五五・五、岩波書店　七八四頁
32 『貝原益軒全集』巻之三所収　昭和四八・五　国書刊行会　九一二頁
33 杉本つとむ『西鶴語彙管見』昭和五七・二　ひたく書房　Ⅲ基本語彙・諺集　二七二頁
35 真下三郎「しほ・しほらし」『近世文芸稿17』広島近世文芸研究会昭和四五・六　一～七頁
36 白幡洋三郎『大名庭園』平成八・四　講談社選書メチエ一〇三　九一頁
37 数江教一『わび』　昭和五八・一　塙新書　二六〇頁

なお散文の本文については、近世文芸資料類従西鶴編1～25（勉誠社）を底本とし、それ以外は定本西鶴全集（中央公論社）によった。異体字・旧漢字については適宜改め、「　」も加えた。